

伊
香
物
語

伊香物語

かはる事―かは
れる事にて普通
ならん意か
くちやみぬる―
朽ち終ぬる意か

いづれの御門のおほん時にや、近江の國伊香郡の司なる人に、いみじうゆたけき者ありけり。其妻かたち世に並びなきのみならず、心やさしく情ありて、花紅葉に心をよせ、四季折々のながめに大和歌を口ずさみ、絲竹をもてあそび、手などをかしく書きて、績み縫ふ業までおろかならず、そのわたりの人思ひかけざるはなけれど、心正しく貞婦の道を守り、五つの徳を修めて、いさゝかざれたる由もなければ、皆人類なき事に言ひわたりけり。其國の守かはる事に傳へ聞きて、いかにもして、此女を得まほしく思ひていはでの森のいはでやとは、真間の繼橋ふみ通はぬ事もなければ、善きにもあしきにも重ねそめにしつまならで、又こと人にまみえず、手にだに觸れぬ玉章のくちやみぬる事となりぬ。このたびの國守もみぬめの浦の思ひ深く、波の立居に心をめぐらし、言にいでては叶ふべきやうにも有らざりければ、いかにもして此女を取りてんと、一つの謀を

物すべし物のす
べの意か
心うちなく腹
藏なく

いみにいみ
きの術か

知らねこの下
に、どもなどい
ふ語落ちしにや

ぞたくみける。まづ國守の御館にのたまはす事ありと、人をして召し寄せける。郡司をつミの夫
何事の仰せにやと、急ぎ参りければ、しかくの由申して奥に召し入れけるに、常に参
るより事おそ嚴かにいとをしくもあひしらはず、心も空そらなるに國守出合ひていふやう、此國
の内に人多かれども、物すべ知りたらん人とは汝をこそと思ひ侍る、然れば何事につけ
ても心うらなく昔今の事ども問ひ聞かんれうに呼びいでぬるとて、珍らかなる果物くだものを初
め、酒肴さけさかなもてなして、いかめしければ、夫よろこびよと飲みつ、昔今の事心ゆくか
ぎり打語りて、國の内の面目めいぼく身に餘りてなど酔ひ泣きしてめで惑ふ。かく打解けたる時
國の守曰く、何事につけてもわが言ひいでん事承り届けつべきやと。男の曰く、こは仰
せとも覚えぬ事かな、時の御門の命をうけて此國にあるとしある事共を、心にまかせて
計はからひ給へとの事なり、しからば守のの給ふ事を否み申さば、御門の旨に忤こたふことわりな
れば、國法を背きていづれの所にか足をとどめん、何事にても申させ給へといふ。然ら
ば汝と我いみに争ひせん、必ず我を憚らず計らふべし、汝勝ちたらば我國の所領以下
を半なか分ちてしらしむべし、其上は心のまゝに計らへ、われ勝ちたらんにおいては善きも
悪しきも知らね、汝が妻を我に得さすべしとて、文机ふづきにある沃懸地いかけぢの硯とりよせ、何や

和歌の本 上の句
末下の句

口かためて一契
約しての意に用
ふ

馴も舌に及ばず
論語顔淵篇に
る

らん書き認めて上に封じて、梨地に松のむらだちて千鳥の騒ぐ方に捨小舟の蒔繪かきたる文筥ふはこに入れ、上にも封つけ印押してさし出し、是をいとも開くべからず、此内には和歌の本もとなん書きてあるぞ、此末を同じ心に詠み合はせよ、汝が家にもて歸り開かずして、これに添へ七日といふにもて參るべし、和歌の上下付合ひたらば、速に此國をわけてしらしむべし、都方の事は我にまかすべし、もし歌の心ことに様さまあしくば、汝が妻をまるらすべしと言へば、夫そとふとむね打騒ぎ、心の内にいかでわれ、神にもあらぬ身の草深き鄙ひなの土に生ひたちて、早苗さなへとり粃打もみつ歌ならでは言ひいでん言の葉もなし、たとひあらはに見聞くとも何程の事かいふべき、まして堅く封じて見せも聞かせもするにこそ、よしなき酔ひの上に心よく口かためて、年月馴れたる一日片時ひしひもえさらぬ中の蘆垣を、人のために押し隔つべきかとは思ひて、我ら賤しき心にて和歌の文字の數をだに知らず、何しに君に勝つ事あらんと、とかく言ひてすまひけれども、さればとよ、とくより言ひ定めしものを、上をかりしむるにやなど、むつかしけに言ひて、馴しも舌に及ばず、むくつけき顔の鬚ひげさへあれば、見あぐるも恐しくて、我にもあらぬ心地して泣くく家路に歸りぬ。

たへがたき一垣
へと絶えとにか
く

片手には面にさ
し當てしは「文
字不用なるべし
啼澤女―神代紀
にある神の名

女房はかくとも知らで、常にもあらず國守に召されて、程過ぐるまで遅きことよと心も
となくて、更けゆく夜半も春なれば、さなきだに霞める月に浮雲のかゝる隈さへ怨しく
て慰むかたのなきまゝに、枕に近き琴を掻き鳴らし調ぶるからに、中の緒のたへがたき
すさみも由なしと置きて、

春の夜のならひに霞む月影もいと涙に曇りはてぬる

あなうたてやと衣うちきて臥しぬ。むかひの寺の鐘の音も夜半過ぐる頃、男は歸りて寢
屋の外にたゝすみで、言もいえず片手には蔭繪の文篋をもち、片手には面にさし當て、
さめくくと泣く。女房は呆れはてて、こは何事ぞやと胸うち騒ぎしが、もて鎮めたるけ
はひにて、やゝ言ふ事あらば申しもし給はで、只泣きに泣き給ふは、啼澤女の神にやお
そはれ給ふらん、怪しきに疾く語り給へといへば、男は知らぬ事とて何をかの給ふ、此年
月そこをば片時去らず馴れむつれて、憂きも喜びもうらなく語り慰み、あはれと思ふふ
しゝも月にそひてまさり草、まさる思ひのうらがれて、見もし見られん事も、今五六
日と思ふが悲しければ、泣かるゝなりといふ言葉のあやも續かず、只妻の顔を守りつゝ、
又雨雲と泣く。女房は思ひよらぬ事なれば興さめて、何のためにしかあらん、事のやう聞

六くさー和歌の
六義をいふ
昔物語―伊勢物
語をさす

わたれる―若文
字不用か

きてのち、とありかかりとわきても答へめ、疾く語り給へといへば、泣くく國の守のもてなしより始めて、しかぐの由語れば、女房とばかりためらひて申す、さはよく聞き給へ、かゝる難題にあたり、國の守に命をめし取らるべきしぎに成るとも、それ猶前世の宿業なり、今更悔むべきにあらず、さりとて免るべき難をそのまゝに過して、おろかなる名を取るべきや、つらく思ふに我國の歌は素盞鳴尊の八雲をはじめ、三十一文字の數はかぞへて知るとも、六くさの深き道に尋ね入る事は更なり、まして見ぬ本歌に叶ふべき末をつがんこと、敷島の道に名高き雲の上人にもあるべき道理かは、昔物語に又逢坂の關と書きしに、かち人の渡れど濡れぬと、觴の底に續松の炭して書きつけしは、見たりし歌の上下にこそあれ、とにかくに國の守へ我を召捕らん謀に陥り給ひしこそせん方なくうたてけれ、かゝる事を愚なる人の心をもてめぐらすとも甲斐あるべき事かは、佛菩薩こそ一切衆生を憐みわたれる心に誠を發して頼み申せば、宿業をも轉じ給ふとなり、中にも大悲觀世音は救世の誓ひ深くして、もろくの苦を抜き樂を與へ給ふ、然れば遠く外に求むべからず、此國の内に入ります石山寺の觀世音こそ殊に靈驗いちじるし、誠にもて頼み給へ、もし宿因深く驗なき時は、憂き事しけき此國に住まぬばかり、われ

ゆする―髪水つ
けて髪を梳るこ
となり

施無畏―観音は
一切群類の畏怖
心を脱せしむる
功德を有するよ
りいふ

したてて―ひた
しての衾か

いもひ―潔齊

ゆふつけ鳥―雞

われ諸共にいづちの山の奥、谷の隈にも影を隠し、身こそわびしき住まひならめ、朽ちぬ契は心の中に變らじものを、諫むべき夫の諫められ給ふは、餘りにいふ甲斐なき迷ひざまかなと、いと面なけに恥しめられて、夫はやうく／＼に人心出で來て、暫く涙を押さへける。さらばその計らひに従ひてんとて、今日より家の内清まはりて、下人はしたに至るまで精進うちし、石山の方に向ひ觀世音を念じて、夜晝となく額づきぬ。さて三日といふ日に、男夜の程よりゆするして、明けたつともに立ちいでて、世は安からぬ野洲川にすむとて人の渡りかね、曇るか影の鏡山、長き思ひの勢田の橋、かけし願ひを見ぬ歌のあふ事かたき石山寺、大悲の誓ひあやまたず、驗をあらはし給へ、救世のほさち施無畏の徳を施し給はど、歌の本末を示し、恐しき國守のにくさけなる面ばせを解き、われに半國をしらしめ、後の世は佛の國に生れ、ほさちに逢ひ見奉るまで、朽ちぬ契の妻諸共に、此世後の世助けさせ給へと、涙を袖にしたてて念願し、其夜は内陣に通夜しける。

此頃の物思ひ、習はぬいもひの心づくしに、道の疲れさへ添ひて、前後の分ちもなく打臥して、更けゆく鐘の響、曉の鈴の音にも目をさまさず寢入りたりしが、ゆふつけ鳥の鳴

ねおびれたる—
ねとほけたる

はげしかれと—
千載、後頼、うかりける人を初瀬の山おろし烈しかれとは祈らぬものを—
三十三應の身—
觀音の化身三十三體あるをいふ

くまでも佛の告はなくて、あまさへ國の守に襲はれ妻を奪ひとられ、我身もいたくさいなまれて追ひ拂はれつゝ、せん方なさにをうくゝとわが泣く聲の我耳に入りて夢は覺めぬ。こは何のしるしぞや、身は汗雲になり、われかの氣色に呆れ果てたり。かなたにはからと鳴る花皿の音して、嵯闕伽奉る法師ばらの、をのこのねおびれたる顔を見て、笑ふが恥しさに、やをら這ひいでて、怨しきに物言ひもやらず、堂をくだりて家に歸るに、參る人も多く、出づる人もある中に、怪む人はさし寄りて、何を歎く人ぞと問ふに、何をか歎かんと答へつゝ、樓門にさしかよる程、いと氣高き上臈の面は白く光るやうにて、まみのあたり打ちけぶりたるが、紫苑色の衣に紫の綾ひき重ね、濃き粕白ききぬかづきて、市女笠きたるに供の女三たり四たり後にさがりて歩みくる。かの夫を見て何を歎くぞと問はせたるに、はげしかれとは言はまほしけれど、何を歎かん、伊香郡より參りたるにと答ふ。猶思ふ事あらんに申さしめ給へと、頻に問ふにこそ、ふと心づきて、佛智不思議の方便は順逆の量りがたく、三十三應の身はいづれにか託し給はざらん、よしそれならずとも道の巷に行きかふ袖の追風、そよと身にしむも宿世のえにしなり、ましてあはれと思へばこそ問はせもし給ふらめと、しかくの事ありて歎く事を祈りしに、菩薩の誓

ひにもれて、せん方なさに歸るなりと語りければ、彼の土臈するくゝと立寄りて、そればかりの事はいと易かりけるものを、疾く語らざりける人かな、其和歌の末は、

みるめもなきに人の戀しき

と言ひやるべしとの給はすを聞くに、嬉しきこと限なし。さるにても君はいづこにおはする御方、御名は何と申すぞ、承りてこそ重ねてよろこびも申さめといへば、武藏野のゆかりの草も假初かりそめの名なれば、いかでそれと打出でん、折節は御堂の東のつまに住むぞ、能くこそ問ひけると打笑み給ふ顔の光、衣のにほひ移るばかりに芳かうはしくて、堂のかたへ歩み給ひしが、立ち隔たる朝霧に隠れて見失ひぬ。男はまさしく救世菩薩の我を助け給ふと、御堂の藁いらかのかくるとまでに顧みて、拜みく口にはかの歌を誦よしつゝ歸りけり。家には女房心もとなさに湖うみの方を眺めやりて、南無觀世音と唱へて、門に出でるて待ち居けるが、夫の顔を見るより、いかに驗しるしやといへば、佛を頼みてしるしなくて有らんやと、かしこけにいらへて内に入りつゝ、しかぐの事共を語れば、女房餘りの嬉しさに聲打上げて、さと泣きつゝ涙も更に堰せきあへず、繰返くりかへし吟ずるに、言葉のつゞき長ながありて頼もしけなれば、緑の薄様うすやうに筆のあや清けに書きて、上を包み封つけて推し戴きく、

参りたりと—と
文字不用なるべ
し
かため—契約

浦島が子の玉手箱、明けてかひなき恨はあらじと、うちまかせたる佛の誓ひを力にて、夫に渡せば、七日といふ夕つかた、國の守の館に参り、仰せのおもければ何の徑路たぐちは知らねども、歌の下つけけると案内あなひさすれば、守はおそし來れ、そのわたり名ある侍、家の子どもある限り召し集め、興あるあらがひに郡司が妻をとられん不便ふびんさよ、よも歌の本末つどくべきやと、喜びて待ち居たり。

程なく参ればよくぞ違たがへず参りたりと、いかに人々も聞き給へ、此歌心詞つどきたらんにおいては、彼かれに國を分ちてしらしむべし、つどかぬ時は彼が妻を我に贈らるべきかためなり、必ず此事違ふべからず、其證人にもなり候へかしと、髭ひげおしなでて居たり。男恐れく心の内にはなも觀世音ほさくと念じ、文篋をさしいだせば、封を切りつゝ改むるに、違ふことあらんやは。扱わがた我方よりの歌を高く吟するに、近江なるいかごの海のいかなればとて、下の封を開きて讀みあけたれば、

みるめもなきに人の戀しき

と吟するに、おのれも人々もはつと言ひて、暫く感ずることやまず。守も餘りの不思議さに男を近くよせて、いかなればかく思ひ寄りしにやと、頻に問ひ責むれば、せん方な

あらみさき―あ
らみたまの誤に
て、荒御魂の神
(守)とつゞけし
なるべし

しるしの文―證
文

國のをの子姫―
誤字あるべし

くて石山の觀世音の教へにまかせて付くると答へければ、さしもあらみさきの守の心も
とけて、佛の力ならでは及ぶべきかはと、人々の上に召しのほす。今よりは國を分ち申す
べし、ともかくも心にまかせ給へといへど、男はいかゞ有らんと辿るばかりなれば、武
士の癖にて、言ひ出でたる言の葉を違ふは道の恥辱なり、人の思はんも恥しく、且は私
にはからひ約をたがへなば、觀世音の咎めも恐しと、しるしの文に、いろ／＼の絹五十匹、
太刀、かたな、砂金百兩、馬、鞍など、引出物に相添へて、けふより半國を計らひ給ふ
べしと、盃とりて勧め、おのれも悦ぶこと限なし。男は面目を世にあらはし、家に歸り
て妻を初め家の内上下悦ぶことたぐひなし。かくて横しまなくおきてし、民草ゆたけく
家の内富み榮え賑しく、あまさへ國のをの子姫一方生ひいでて、夫婦悦びを重ね、行末
長き樂みとなりにけり。これひとへに賢き妻の諫により觀世音に歸依し、信をもて祈れ
ば、大悲無邊のあはれみを施し給ふ靈驗、豈疑ふべけんや。郡司は觀世音の厚恩の報ぜ
んために、石山寺に一日の法會を行ひ、これを恒例として今にたえず、子孫相續いて勤
めけり。

つらく此歌の心を案すれば、所は近江の伊加胡郡なれば、それによそへいかなればか

咎め給ふ―原本
「かゝめ給ふ」と
あり今改む

佛像―佛縁の誤
か
眞淨の道―眞如
淨土の道

く思ふにやと上にいひしにつけて、見る人ならばこそ、見もせぬ人の何しに戀しき道理あ
らんと咎め給ふ心にぞあらん。それをこゝは鹽ならぬ海なれば、蟹の刈るみるふさわめ
やうのたぐひも無きにといふ詞によそへて、みるめも無きにと續けたり。此歌の一ふし
に鬼神きしんの如くなる國守の心を柔やはらけ、佛力の深きを驚き、菩提の道に入ること誠に歴劫不
思議にあらずや。郡司も佛力を頼みて妹背いもせの中絶えず、家ゆたかにして佛道を修し、二
世安樂を得る。あだなる迷ひのすぢを深き佛像に引きかけ、終に一大事の因縁と成就する
事を思へば、いづれの門よりして眞淨の道に入らざるべき、利生の方便量りがたし、仰
いでたふとぶべし。